The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Ostensive cues in early mother-child interaction
Author(s)	志澤, 美保
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59307
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	志　澤　美　保（しざわ　みほ）
博士の専攻分野の名称	博　士（小児発達学）
学　位　記　番　号	第　２５０６３　号
学 位 授 与 年 月 日	平成 24 年 3 月 22 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第１項該当 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科小児発達学専攻
学　位　論　文　名	Ostensive cues in early mother-child interaction （早期の母子相互交渉における明示的手がかり）
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　谷池　雅子 （副査） 教　授　小泉　晶一　　教　授　金澤　忠博

論 文 内 容 の 要 旨

〔　目　　的　〕

大人は子どもに対して「アイコンタクト」、「子どもに向けた特徴的な声かけ：Infant-Directed Speech（IDS）」、「子どもに向けた大げさで分かりやすいモデル提示：Infant-directed action（IDA）」といった行動を示す。これらの大人の行動に、ヒトは発達初期から大変敏感であり、容易に検出できること（Sperber & Wilson, 1995）が知られている。大人が示すこれらの行動は、近年、Natural Pedagogy 理論（Csibra & Gergely, 2009）において、伝達意図の存在を受け手に気

づかせるための明示的な手がかり（ostensive cue）として改めて注目されている。この理論では、ヒトには生得的に効率よく認知社会学習する能力をもっており、その能力を引き出すトリガーが ostensive cue であると仮定している。先行研究においては、統制された実験条件下でこの cue に対する乳児の反応を確認してきたが、様々な要因が混在する日常生活において実際 cue はどの程度用いられ、また日常でも同様に cue の効果を確認できるのか、先行知見の日常への般化性については検討されていない。日常には様々な場面があり、例えば、文化的学習を含めた学習の場である遊びや食育の場である食事は、乳幼児にとっていずれも重要であるが、場面における cue の出現やその場面間の違いは明らかではない。

これらの cue について、発達のごく早期から社会的相互作用において定型発達児との相違を示すことが知られている自閉症児は、定型発達児と比較して cue への応答の相違を示すことが予測され、実際に実験的に確認されている部分もある。日常場面の中で、食行動の問題も自閉症児は定型発達児と比較して有意に多いことが質問紙調査を通して指摘されている（Schreck, 2004）が、食事中における実際の行動面でのやりとりについては検討されていない。Natural Pedagogy 理論をベースとして、自閉症児を含めて、日常の母子相互交渉における ostensive cue の特徴や効果を明らかにすることは、自閉症児との相互交渉にみられる cue の効果を理解する上で大変重要である。

したがって本研究では、子どもとその母親の日常的なやりとりの場面における cue の生起を観察し、子どもの障害特性や発達における母親の cue の機能と役割を検討することを目的とする。研究 1 においては、食事場面と遊び場面をとりあげ、自閉症児と定型発達児の母子を対象に、母親が示す cue の質的・量的な事例検討をする。明示的な手がかりを使用する頻度が高いと推測できる嫌い／苦手なものを提示する場面を設定し、好きなものを提示する場面と対比して、場面や子どもの特性によって大人が示す cue の種類や量が異なっているのかを明らかにする。研究 2 では、子どもとのやりとりの中で、注意をひく行動である cue の占める割合やその効果についてみるため、やりとりを維持する為の行動（maintaining attention）と注意をひくための cue の使用頻度と種類について、自閉症児群と定型発達児群において比較する。また、IDS においてはピッチ分析を加え、場面や状況によって母親の IDS の高さに変化があるのかを調べる。研究 1 と研究 2 を踏まえ、母子の相互交渉の上での母親から出される手がかりの機能と役割について考察する。

〔　方法ならびに成績　〕

研究 1

対象：自閉症児および定型発達児の母子、各 1 組。

手順：2 場面（食事場面、遊び場面）、2 刺激（嫌い、好き）を設定し、各場面において 2 つの刺激を同時に提示し、母子でやりとりをしてもらった。記録はビデオ撮影により行い、各場面 10 分程度行った。各場面の分析には緊張がほぐれた後半の 5 分間を用いた。

行動指標：先行研究に基づき下記のカテゴリーに沿って、母子共に 1 秒毎のサンプリングを行った。母親の行動は、6 つのカテゴリーに分類した：①IDS、②“子どもの名前を呼ぶ”、③“対象物の名前を呼ぶ”、④Infant-directed action（IDA）、⑤指さし、⑥“眉毛をあげる”。母親の cue に対する子どもの応答は、①触る（食べる）、②見る、を記録し、母親の cue の前後の子どもの行動変化によって 2 つに分類した：①変化あり、②変化なし。

結果と考察：子どもの特性に関わらず、母親は IDA と IDS を多用し、食事場面より遊び場面で多く cue を使用した。食事場面での cue が少なかったのは、母親は子どもが食べている間は「食べる」という目的達成が明らかなため、cue を出さずに待機している可能性が考えられる。母親の cue を向けた対象については、子どもの嫌いなものが多かった。ostensive cue には子どもがポジティブな反応を返す傾向がある（Csibra, 2010）ことから、ポジティブな反応を得るために嫌いなものの場合に多く用いられたと考えられる。自閉症児と定型発達児を比較すると、遊び場面において自閉症児の母親の方が多く cue を示し、使用している cue の種類も異なっていた。子どもの応答については、自閉症児・定型発達児ともに同様の傾向を示し、母親の cue に対する子どもの応答の 60%が肯定的な変化であった。 母親の使用した cue の種類の相違から、母親は子どもにとって最適な cue を使用することで子どもの反応に差がでなかった可能性が示された。

研究 2

対象：自閉症児群 母子 7 組、および定型発達児群 母子 8 組。

手順：研究 1 と同様に 2 場面（食事場面、遊び場面）、2 刺激（嫌い、好き）を設定した。嫌いなものと好きなものに対する行動をより明確に分離して評定するため、1 場面につき 1 つの刺激とし、各 3 分間のやりとりをビデオ撮影した。

行動指標：研究 1 と同じ 6 つのカテゴリーを用いて、母子共に 1 秒毎のサンプリングを行った。さらに、母親の行動が生起する直前の子どもの行動によって、①cue と、②維持する行動（maintaining attention）に分類した。

結果と考察：自閉症児の母親は定型発達児の母親より cue を多く使用する一方で、注意の維持のための行動は少なく、特に食事場面においてその差は顕著であった。これは、注意の持続が難しく、食べ物の好き嫌いに対しての固執性が高い自閉症児の特性が関与していると考えられる。母親の IDS については、両群に差はなく、両群共に遊び場面においてより高くなることが明らかとなった。このことは、母親は子どもの注意を引きたい時に自然に声が高くなる特質をもつ可能性が示された。子どもの応答については、遊び場面において定型発達児群との差が大きく、定型発達児群ではポジティブな変化が高かったのに対し、自閉症児群では変化が乏しかった。自閉症児群は 1 つの対象に集中していることができずに離席が多く観察されたことが名前を呼ぶ cue を増やす要因となり、反応の有無にも影響していることが考えられる。

〔　総　　括　〕

研究 1 と研究 2 をふまえて、母親は子どもとのやりとりの上で、子どもの注意を強くひきたい時に cue を使用し、また自分の子どもの特性やその場の状況に合わせて選択し使用していることが明らかとなった。また、場面によって母親の行動が異なったことから、食事場面には遊び場面とは異なるやりとり関係があることが示唆された。また、IDS のピッチについての知見は、ヒトの大人がみせる生得的な行動の一つとも捉えられ、母子の学習場面における相互交渉を成立させていく上での重要な機能の存在をうらづけるものとして大変意義深いものである。今後は、発達変化にともなった子どもの特性の変化についての検討を通して、社会的相互交渉の上での cue の役割と効果をより明確にすることが求められる。先行研究でなされてきた実験的検討にこうした日常のやりとりにおける検討を続けることで、これらの知見が、子どもとのやりとりに困難を抱える母親および療育に携わる医療、教育の従事者への育児サポートの一助になると考える。

論文審査の結果の要旨

Natural Pedagogy理論とは、大人が子どもに向ける特徴的な声かけ（infant-directed speech: IDS）やモデル提示（infant-directed action: IDA）等の明示的な手がかり（ostensive cue）を子どもの生得的な学習能力と関連させ、理論化しているモデルである。本研究では、Natural Pedagogy理論をベースとして、明示的手がかりについて、半構造的な場面を設定することによって検証した。具体的には、遊びと食事の2場面において、好きなものと嫌いなものをやりとりの2つの対象として取り上げ、さらに子どもの障害特性の有無との比較をすることによって母親の明示的手がかりの使用頻度やその種類を２つの研究を通して検討した。

定型発達と自閉症の乳児とその母親各一例を対象とした研究1では、日常に近いやりとりの中での明示的手がかりを詳細に検討した結果、場面による様相の差異や嫌いなものに多く用いられることが明らかとなった。また、子どもの障害特性によって明示的手がかりの使用頻度や種類が異なる可能性が示された。研究2では、定型発達児群7組と自閉症児群8組を対象に、明示的手がかりと注意維持行動の役割を比較した結果、自閉症児の母親は明示的手がかりを、定型発達児の母親は注意維持を多用しながら子どもとやりとりをしていることが示された。同時に、IDAを多用することや、IDSの周波数の高さにおいては両群に差がなく共通性があることが示された研究1と研究2をふまえて、以下のことが示された。

1) 母親は子どもとのやりとりの上で、子どもの注意を強くひきたい時にcueを使用し、また自分の子どもの特性やその場の状況に合わせてcueを選択し使用していることが明らかとなった。
2) IDSの周波数についての知見は、ヒトの大人が乳幼児に示す生得的な行動の一つと捉えられ、母子の学習場面に

おける相互交渉を成立させていく上での重要な機能の存在をうらづけるものと考えられた。

これらの研究成果は、今後の経時的な検討により、社会的相互交渉の上でのcueの役割と効果の解明につながり、子どもとのやりとりに困難を抱える母親および療育に携わる医療、教育の従事者への育児サポートの一助になることが期待できる。したがって、本研究は学位に値すると考える。